
俺の名はウルフマン

うきせくさこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の名はウルフマン

【コード】

N3009BA

【作者名】

うきせくせり

【あらすじ】

ウルフマンに憑依した彼の栄光の軌跡

第01話(前書き)

俺はこの日全てを失った

(『ウルフマン 栄光の軌跡』より)

第01話

ブレーキを踏み間違った車が歩道まで突っ込んできて、それに巻き込まれてしまったはずだ。しかし意識が戻り目が覚めるとそこにはマッチョが群がってきている光景だった……。

おいおい、これは一体どんな悪夢だよ。ここが天国なら薄着な巨乳の美女が囲んでくれるところだろう。なのにマッチョに囲まれるなんて地獄じゃないか！キリキリと襲う頭痛に身を任せ、俺は意識を失うことでその光景を見なかったことにした。

再び目が覚めるとマッチョなんぞ姿形もなく病室のベッドの上で寝ていた。やっぱりあれはただの悪夢だったんだ。マッチョなんて最初からいなかったんや！

そう喜んでいると白衣をきたマッチョが入室してきたのだ……。どうやら悪夢は継続中らしい。最悪だ……。白衣のマッチョは医者らしい。医者にしては鍛えすぎだろ。

「いや意識を取り戻してよかった。リングの上で倒れてからずっと意識が戻らなかったからね。心配したよ」

意識を失ってからここに運び込まれたのか。うん？なにか聞き捨てならないことを聞いたような。リングの上ってどういうことだ？俺は車に轢かれたはずだ。リングではなく道路のはず。一体どういうことだ。

「先生、今リングの上で倒れたとおっしゃいましたが、俺は車に轢かれたのでは？」

「なにを言っているのかね？君は教官の指導中に投げ飛ばされて、頭を強く打ったんだ。どうやらそれで意識が混濁してしまったのではないのかね？」

そんなバカな、いくらなんでもそれはないだろう。投げ飛ばされるなんて柔道かなにかの稽古だと思うが、元々身体を鍛えていない俺がそんなことをするはずがない。しかし医者がいうことを完全に否定するにはできなかった。何故ならば車にぶつかったにしては目立った外傷はない。というか見慣れている自分の身体が見違えるように筋肉質な引き締まった身体に変わっていたのだ。ペタペタと身体を触りながら確認していくと強烈に違和感を感じてしまった頭頂部に手をやる。こんもりと盛り上がった髪の毛の塊。これは所謂丁髷か？

「せ、先生、鏡。鏡を持ってきてくれませんか！？」
鏡を覗き混んで愕然とした。そこにはいつもの見慣れた冴えない顔ではなく驚愕の色に染まってはいるが精悍な顔つきをした関取の顔だったからだ。

「先生、お、俺の名前はなんですか……？」

有り得ない。有り得ない話だがまさかこの現象はこれは……。

「……どうやらまだ混乱しているようだね。いいかい君の名はウルフマンだ」

その時俺は憑依してしまっただと明確に自覚した。

ウルフマンは「キン肉マン」という漫画に出てくるキャラクターだ。外見は関取の扮装で張手や投げ技といった相撲技を得意とし、キン肉マンのライバルキャラとして登場した超人である。（超人は人間の能力を超えた者のことでありいわばウルトラ的なヒーローや仮面的なヒーローをイメージしてもらえばいい）キン肉マンに敗れ、アイドル超人として味方になるわけだが、周囲から浮くキャラクターということで作者がかつこよく死なせることを意識した演出によって、作中では三度も死んだ（死にかけた）ことがあるのだ。所謂キン肉マンでのヤムチャ的存在である。因みにアニメ化されたとき諸般の事情からリキシマンと名前を変更されている点を考えると俺が憑依した先は漫画版の世界だと考えられる。

必死になって俺の置かれた状況を説明した。しかし医者も笑って取り合おうとはしない。くそうこのヤブ医者め。……いやどう考えたって俺のほうが正気だとは思えないか。俺だってなにかの冗談であってほしい。けれど寝ても覚めてもこの悪い夢から覚めることはなかった。

結局、俺はウルフマンとして生きていくことを決めた、というか決めざるを得なかった。記憶を喪失してしまったと周りには言っている。ウルフマンの普段の性格などわかるわけがないし、細かい来歴もわかるわけがない。だから都合の悪いことは記憶を失ったとごまかすようにしている。

病院を退院後、俺はヘラクレスファクトリーに戻ることになった。ヘラクレスファクトリーとは正式名称「正義超人格闘術大学校」といいアンドロメダ星雲レッスル星にある超人レスラー養成学校のことだ。正義超人は14歳から4年間ここで学ぶことを義務付けられ

ている。続編である「キン肉マン?世」では平和な時代が続いたために閉校してしまっていたが、今は1974年。三十年以上も昔だから悪魔超人のような悪行を行う超人達も横行しており、ここで戦術を身につけるのだ。ウル ラ的なビームのような技ではなく、レスリング的な格闘技術をだ。

しかし今まで鍛えたことがない俺がやっていけるんだろうか。義務である以上逃げようがないのは分かっているが……。教官に促され走り込みをさせられる。嫌々ながらに走り出す俺。どうせ今までみたいすぐに息切れしてへたりこむんだらうと憂鬱になりながら。

しばらく走っていると、次第に違和感が大きくなっていった。うん？なんだ？すでに息切れしてもおかしくないはずなのに、全然そんな心配がない。むしろまだまだ走れるほど余裕を感じる……。はっ、そうか！あくまで肉体的には超人ウルフマンなのだ。だからこそこの程度のことなんて大したことではないのか！

気がつくといつの間にかフルマラソンに移行していた。流石に体力のない超人がちらほら出始めているが全員食らいついてはいる。自分も息は上がってはいるがトップ集団の中においてまだまだ余力があった。凄い超人凄い、正直言って舐めてた。色物キャラとは言え一度は主人公のライバルキャラだったのだ、能力が低いはずがない。

もしかするとウルフマンって凄いんじゃないか？キン肉マン、スプリングマンにやられはしたが、戦いようによつては十分巻き返せるような気がする。ケンダマンとスクリューキッドにはいいようにやられたが、手の内はわかっているんだからいくらでも対策が取れるんじゃないか？

……ふ、ふふふふふふ。脇役で負け組な人生を送ってきた俺だがこ

れはチャンスだ。なにしろ超人の体を手に入れた上原作知識まであるのだから。これから勝って勝って勝ちまくってこの世界の主役になつてやる！

主人公はこの俺だ！俺の名は　ウルフマン！

第02話(前書き)

Q、多彩な必殺技を使われますが、御自身で考案されたのですか？

A、今使っている技の殆どはヘラクレス・ファクトリーの訓練で編み出した技だ。勿論、俺のオリジナルさ。

(ドキュメンタリー 「密着！ウルフマンの日常」より)

第02話

ウルフマンについても少し詳しく話そう。ウルフマンは現在の年齢は14歳。出身は日本。容姿が力士ということから想像できるだろうが、相撲技を得意とする。張り手や投げ技が基本なのだ。超人強度は80万パワーで1000万パワーを越す敵が沢山出てくるので（続編ではそんな超人は少ないが）作中では低い方である（最もヘラクレスファクトリー内では高いようだが）超人強度は超人の持つパワーを数字で表したものであり、強さの指標みたいなものなんだが、原作では低くても勝ってはいるので絶対的なものではない。だから十分に自分でも勝つことができるはずだ。アームレスリングのチャンピオンが格闘技のチャンピオンに成れるかというようなものだと思えばいい。

ただ自分としてはパワーが低いのだからパワーを必要とする投げ技だけではなく色々な技を習得したほうがいいのではないかと思う。投げ技は性質上相手と組み合わせるを得ない。超人強度が低くても投げ技が通じないわけではないが、組めばパワー勝負も有り得るし、組み合わせれば投げ技しか使えないのだったら幾らでも技を返されてしまっただろう。そもそも組み合わせまでのパターンも張り手、タックルのみだ。折角鍛えている足を使つての蹴りがない。蹴り技もあればリーチが長くなるし、攻撃の幅も広がると思うんだが。

ヘラクレスファクトリーでは基本的な技も講義に含まれている。そこで俺は相撲技以外の技の習得に励んだ。その修業で判ったことは、自分はファイターであることだ。ファイターとは超人レスラーの分類のことで、派手な技を覚えやすい反面防御や関節技が覚えにくい性質を持つ。なので必死に技の幅を拡げるために関節技などもやってはいるのだが、如何せん覚えが悪くなかなか身を結ばないのだ。

代わりにネタでやった格闘ゲームの技はできるんだから笑えない。しかもご丁寧なことにストリートファイターのエドモン 本田の技はなかなかの再現率で実用的にまでなったのである。どうやら身体の芯まで相撲から離れられないらしい。なので史上最強の弟子的に出た実践相撲やその他ゲームやアニメ漫画の相撲キャラの技をパクってる。物理的にはおかしな技でも超人だからだろうか。派手な技なら割と簡単に再現できてしまう。

けれどそれらの技は威力は充分使えるのだが、どうも全体的に纏まりにくい。隙が多かったり、技がうまく繋がらない 格ゲーで言ったらコンボが繋がらないとでもいうのだろうか ためにヘラクレスファクトリー内での組み手の成績は中程で伸び悩み中である。全くゼロの経験からここまで来るのに一年以上要した。ただ技は珍しいものが多いからからラーメンマンやらテリーマンといった同期の原作キャラがちよくちよく偵察に来ている。

ああ因みに今はいないがロビンマスクもいた。あいつ、1980年の超人オリンピックの時点で26歳だったはずだから今は20歳以上なのに14〜18歳が通うヘラクレス・ファクトリーにいるのはおかしい。まさか留年かよと思ったが、そうではないようだ。ロビン一族の教育の関係もあって一年のみの飛び級みたいな扱いらしい。ロビン一族は有名な超人の家系であり本人も活躍してたので例外でそうなったそう。そう言えばキン肉マン？世でもあいつみんなと一緒にヘラクレスファクトリーで勉強してる回想があったなと妙に納得してしまった。

ついでにその回想に出ていたブタ キン肉マンの代わりに入学しているキング・トーンもいた。こいつはキン肉星の王子であるキン肉マンと間違われて拾われたブタなんだが（宇宙船で旅行中に親がブタとキン肉マンを間違い、キン肉マンを地球に捨てた）格闘技チ

チャンピオンになるだけあって強い。今は俺のほうが弱かったりする。（こいつは暫くして格闘技オリンピックに出場するためにヘラクレスファクトリーを去ったのだが、まだ先のことである）

閑話休題

しかし自分の技を独学で噛み合わせようとするのはなかなか難しいのだ。教官にも相談してアドバイスは貰っているがなかなか身を結ばない。やはり師を得て自分の闘い方を身につけなければならぬだろう。師匠か……。一人だけ心当たりがあるが弟子入りできるだろうか。

それから一年が過ぎた。ヘラクレス・ファクトリーの卒業の時期である。最終試験 教官と戦って勝てば卒業でき、成績が優秀であれば平和を守るために地球に派遣される。

最終試験では教官を張り手でひたすら攻め抜き、倒れたところを四股トルネード 史上最強の弟子で使われた相撲の四股を用いた踏み技である であっさりとけりを付けた。

成績は上の下であり、テリーマン達よりは低かったが優秀者にギリギリ選ばれたようだ。派遣先は日本だが俺はそれを辞退した。やはりまだ自分のスタイルが確立できていなかった為、一度みっちり修業をしたいと前から考えていたからである。

ヘラクレス・ファクトリーで卒業した同期と別れを告げ、俺は一路ハワイへと向かった。

第03話(前書き)

俺はハワイで生涯の師匠と出会った。その人には一生頭が上がりないね。

(対談 ウルフマンの半生を振り返って より)

第03話

「お願いします！弟子にしてください」

地面を擦りつけるようにして土下座する。ハワイでこれが通じるのかはわからないが誠心誠意対応するに越したことはないはずだ。目の前にはとても70歳を越えたようには見えないほどの筋肉が隆々とした褐色の超人がいる。この人こそキン肉マンの師匠であり、キン肉マンを公式戦で唯一敗ったと言われるハワイの巨星、プリンス・カメハメだ。

原作では1000回目のハワイ超人ヘビー級の防衛戦でジェシー・メイビアに敗れ、ジェシー・メイビアを倒すために付き人になるが老齢のためパワーが衰えていて勝てる見込みがなかった。そこでハワイ遠征にきていたキン肉マンの素質を見出し、キン肉マンに自身が編み出した48の必殺技を一週間で授け、ジェシー・メイビアを倒させたのだ。そして彼が編み出したカメハメ殺法は実は48の必殺技の他に52の関節技が存在し、それらを習得してはじめてカメハメ殺法100手となる。ファイターであるキン肉マンにそれを授けようとして、試合の中で厳選した3つの関節技を仕掛けることでキン肉マンに52の関節技を授けるといふ荒業をやったのけるといふ名伯楽としての側面を持っているのだ。

作者も最強の超人は全盛期のプリンス・カメハメと言っていることから、彼から学ぶことができればきつと弱点を解消できるはずだ。キン肉マン以外にも弟子を取っている描写もあるし、決して可能性がないわけではない。

現在のプリンス・カメハメはまだハワイ超人ヘビー級チャンピオン

である。ジェシー・メイビアはキン肉マン（俺と同じ年）より2歳年下だからまだヘラクレス・ファクトリーにいるはずで、恐らく超人オリンピック前後にチャンピオンの座を追われるのだろう。

しかしジェシー・メイビアはキン肉マンと戦う前に999回防衛戦を行っていたはずだ。もしかして、ヘラクレス・ファクトリーには行かなかったのか？たしかジェシー・メイビアの超人養成ジムがあったし、その出身なのかもしれない。まあ、宇宙中の超人が集められているのは考えにくいしな。

「頭をあげるんじゃ」

「ではっ……！」

「うむ、お前はやや功名心が高いようにようじゃの。だが、強くなりたいという意志は本物のようじゃ。だから弟子入りを認める」

「あ、ありがとうございます！」

やった、やったぞ！まさか初対面で野心を指摘されるとは思わなかったが、弟子入りができたのは一歩前進だ！原作の第20回超人オリンピックが始まるまであと1年と11ヶ月。ウルフマンの登場は更に1年先の第21回超人オリンピックだが……、遅くともそれまでにはカメハメ殺法100手をマスターし自分のスタイルを確立したいものだ。早く習得できれば第20回にも参加したいけどな。しかし、ウルフマンは同じ年なのに、なんでキン肉マンやテリーマンよりデビューが遅かったんだ？

それから一ヶ月。新入りの下っ端ということで、兄弟子達の食事の支度やカメハメ師匠のトレーニングの為の準備、掃除、洗濯など一手に引き受けるため、朝は早く夜は遅い。まさか絵に書いたような

内弟子生活をやるとは思わなかったが、強くなるために必死に耐えた。時間があれば師匠や兄弟子の試合を見て技を盗む。こういつてはなんだが、兄弟子の實力は大したことはない。せいぜいヘラクレス・ファクトリー時の中の上ぐらいといったところか。余程俺の同期は当たり年だったらしいな。仮とはいえ名門の生まれのロビンマスク、超人オリンピックチャンピオンに輝いたドリーマンを父に持つテリーマン、多彩な技を持つラーメンマン、他にも原作モブをちらほら見かけた……よく考えればそんな強い奴らがいるのだから、レベルが上がるのは当然か。

実力的には俺のほうが上だが、体育会系よろしく上下関係はきつちりやらされている。おかげで今日も夜遅くに一人練習だ。辛いが一つ一つだが着実に技を覚えて強くなっているのは楽しい。

「52の関節技の一つ、脇固め！」

この技はヘラクレス・ファクトリーでもやってはいたが、人形相手に極めてみても、どうにもうまくいかない。まだ師匠から直接指導はしてもらっていない。やっぱりファイターだからなんだろうか見ただけでは関節技は難しい。そのかわり48の必殺技のいくつかはできるようになったんだが。

「……ムッ、ウルフマン。こんな時間まで精が出るな」

「し、師匠!？」

人形を捨て姿勢を正そうとする。師匠は手で制した。

「どれ一つ稽古をつけてやるっ」

「しかし師匠、明日試合があるのでは？体を休められたほうがよいのでは」

翌日は夜からとは言え防衛戦が控えているはずだ。だから今日の師匠は調整を軽めにこなしていたはず。

「構わん。明日の試合のせいか気分が昂ぶっておつてのう。軽く体を動かしておこうと外に出たまでよ。だからちようどよかったのじや」

……嘘だ。970を越す防衛戦を前に緊張して寝られないなど有り得ない。だが　だがそれを指摘するのは野暮だろう。思わず感激して落涙しそうになるが、ありがとうございまして頭を下げることでそれを隠した。

俺は多分この日のことを忘れない。師匠から受ける稽古で必死に技を覚えようと関節技独特の痛みを刻んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3009ba/>

俺の名はウルフマン

2012年1月14日13時47分発行